

日本におけるウィルソン：知の統合

横山輝雄*

1

「知の統撰・統合」の問題を、日本と韓国におけるE・O・ウィルソンの理解を中心として検討し、それとの関連でドーキンスの「科学と宗教」についての最近の議論について日本と韓国の比較を行う。それらをふまえて人文学における日韓両国の学术交流の意義を考えたい。

エドワード・O・ウィルソンは、『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』で、「科学者と哲学者が協同するのにこれほどの好機はかつてなかった。生物学と社会科学と人文学の境界においてはとりわけそうだ。私たちは新時代の総合に、統合の試みが、やりがいのある知的難問のなかでも最大の課題となるそのときに、近づきつつある」と述べ、「世界が現実、知の統合をうながすように働けば、文化の活動は究極的に、科学（自然科学）と人文学（とくに創造芸術）の中に組みこまれると私は考える。

* 南山大学人文学部教授

これらの領域は、21世紀には学問の二つの大きな枝になるだろう。社会科学の諸分野は、すでに敵対的にはじまっている分裂をつづけ、一部は生物学に包含されるか、あるいはつながり、残りは人文学と融合するだろう。諸分野は存続するが、かたちは根本的に変わる」とする。このことは、現在の大学教育を考えるにあたって重要であると彼は考えている。「統合の探求は、教育においては、くずれつつあるリベラル・アーツの体系を復活する道になる」「大学生はみな、次の質問に答える能力をもつべきである。科学と人文学の関係は何か。それは人間の幸福にとってどのように重要なのか」¹。こうした問題意識は、哲学などの人文学の大学における意義が認められなくなりつつある日本の大学にとっても共通するものがある。

ウィルソンは、最初バプテスト派のキリスト教徒として教育を受けたが、その後進化論にふれたことなどをきっかけに、次第に教会から離れていったが、「確固とした不可知論者や無神論者になったわけではない」。「私たちは、どこからきて、なぜここにいるのかを語る物語をもたねばならない。ひょっとすると聖書はただ単に、初めて文字で宇宙を説明し、私たち自身をその宇宙の重要な存在として位置づけるための試みだったのではなからうか。おそらく科学は、それと同じ目的を達成するための、より検討された新しい立脚点に立つ続編なのだろう。もしそうなら、その意味において科学とは、解放され拡大された宗教である」と述べている²。つまり彼は、「知の統合」を科学と宗教をめぐる範囲でも考えている。ただし、彼自身の統合の試みは科学寄りのものであり、そうした主張に対する批判があることを想定している。批判者は「融合、過度の単純化、存在論的還元主義、科学主義といった言葉をあげて、あるいは「イズム」という非難をこめた接尾辞

1 エドワード・O・ウィルソン、山下篤子訳『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』角川書店、2002年、17-19頁

2 同上、11-12頁

をつけたそのほかの罪状をもちだして、告発するだろう」と記している³。

ウィルソンは『知の挑戦』に先立って1975年に『社会生物学』を出版した。本書はアメリカで大きな論争をまきおこした。それは現在では歴史的なものになりつつあり、社会生物学論争についての書物も刊行されている。特徴的なことは、日本ではアメリカのような社会生物学をめぐる激しい論争はおこらなかったことである。日本で社会生物学を受け入れた人々は、一方ではグールドやレウォンティンらの社会生物学批判を「現状を説明することは、現状を肯定することになる」という立場の政治的にすぎるものだとして否定し、この点ではウィルソンを支持している。しかし、人間や社会についてのウィルソンらの議論を必ずしも支持してはいない。ウィルソンの人間についての議論は、他の動物についての議論に比べて証拠不十分な強引なものであるとしたり、社会科学が社会生物学に統合されたりするわけではない、とする議論などがそうである。「社会科学系の諸学が、将来、社会生物学という一つの理論枠の中に解消されるだろうという主張が誤りであることは確かです。この世の現象にはいろいろレベルがありますから、レベルごとに違う学問が存在して当然です。……人間の社会現象には生物学の用語ですべて書き表すことのできない固有の部分があることは自明です」「高分子化学の新たな発展によって生物学の一部が変容しているように、進化生物学の発展によって、人間を研究する学問の一部にも変化が起こってきているということなのです」といったものである⁴。したがって、ウィルソンの「知の統合」を積極的に支持するような議論はなく、そのためウィルソンの「統合」を批判する議論もあまりない。

それに対して韓国では日本と比べウィルソンの「統合」により理解を示しているようである。韓国では「統合」ではなく「統撰」という訳語が用

3 同上、17頁

4 長谷川寿一他『進化と人間行動』東京大学出版会、2000年、20頁

いられているようであるが、それが専門家だけでなく広く一般にも議論をまき起こしているという。また一部にはウィルソン自身やそれを支持している人々の議論に対する強烈な批判も韓国にはある。これは日本とは違った事態であるように思われる。

しかし、日本でもそれに対応する議論が全くないかという点必ずしもそうではない。例えば「文理融合」や、しばらく前の「学際」などがそれと重なる問題意識をもっていると考えられる。ただしそれらは、思想や世界観というより、大学教育の制度をどうするかという次元の用語であり、実際にもそうした場面で語られている。ここには、思想や世界観でまず原理原則を打ち立ててそこから演繹的に考えるのではなく、具体的な現実問題をどうするかを考えるというプラグマティックな日本的思考法があり、この点は日韓の文化の違いを反映しているのかもしれない。

2

つぎに「科学と宗教」をめぐる問題について検討しよう。この問題は、欧米では19世紀後半の「科学と宗教の闘争」以来の問題である。20世紀には科学と宗教の「分離と相互不干渉」が広がった。しかし21世紀になると、一方に科学と宗教の「対話」や「統合」がいわれるとともに、他方では「闘争」の復活といったこともみられる⁵。「利己的遺伝子」で有名なドーキンスは『神は妄想である』などの公然たる宗教批判を開始し、それに対して神学者のマックグラスらが反論するなどの論争が起きている。こうした状況のなかで進化生物学者グルードもその晩年に科学と宗教につ

5 拙稿「近代日本における科学と宗教」『アカデミア』人文社会科学編（南山大学）第83号、2006年、23-39頁

いてのまとまった書物を刊行している⁶。

日本では、そもそも明治以来科学と宗教の「分離と相互不干渉」あるいは「相互無関心」の状態が続いており、一部を除き「科学と宗教」という問題設定は広がっていない。ウィルソン、ドーキンス、グールドの書物は多く日本語に訳され読者も多いが、それは「科学と宗教」という問題にまでつながっていない。ドーキンスの『神は妄想である』の訳書が刊行されてはいるが、それをどう受けとめるかで当惑している。つまり、それを支持すわけではないが、さりとて反対するわけでもない、というわけである。ドーキンス批判の神学者マックグラスは、その神学関係の書物は多く日本語に翻訳されているが、ドーキンス批判の著書はまだ翻訳されていない。それは、日本のキリスト教関係者にあまり「科学と宗教」の問題への関心がないことと、外部との論争を好まない日本の特質の反映であろう。

それに対して韓国では状況が違うようである。ドーキンスの『神は妄想である』の韓国語訳は10万部を越えており、またマックグラスのドーキンス批判の韓国語訳もすでに刊行されていて、日本よりもこの問題に対する関心が高い。その背景には日本に比べて韓国はキリスト教徒の比率が高いことがある。しかし、それだけではない。確かに日本のキリスト教徒は少ないが、しかし一定数はおり、そこではキリスト教関係の書物の翻訳などもかなり行われている。原理をめぐる論争を好まない日本の特質と、原理原則についての論争が多く行われる韓国との文化の違いもあるのではないだろうか。

6 リチャード・ドーキンス、垂水雄二訳『神は妄想である』早川書房、2007年、スティーブン・J・グールド、狩野秀之訳『神と科学は共存できるか』日経BP社、2007年、McGrath, Alister, *Dawkins Delusion?*, 2007

3

以上のように、ウィルソンの『知の挑戦』をめぐる日韓の違いと、ドーキンスの科学と宗教をめぐる議論についての日韓の違いには共通点がみられる。それは、韓国は日本に比べてよりアメリカに近いのではないかということである。日本ではウィルソンの支持者があまり「統合」的な方向に進まないのに対して、韓国では「統合」（あるいは「統撰」）をより強く求めている。また、ドーキンスの宗教批判についても、日本のキリスト教徒よりも韓国のキリスト教徒の方が関心（あるいは反発）が強いようである。こうした違いは何に由来するのであろうか。アメリカとの関係が深いことは日韓両国に共通であるが、韓国の方がアメリカとの関係が日本よりも強固であることもあるだろう。

またさらに、儒教の受容について両国の違いにみられるような近代以前にさかのぼる伝統の違いもあるだろう。韓国の儒教が朱子学一辺倒で、政治と結びついて激しく論争されたのに対して、日本では「寛政異学の禁」などがあったとはいえ、儒教は陽明学や古学にまで拡散し、政治との結びつきも間接的であったという違いと対応しているのかもしれない。

そうだとすると日本から見た場合、韓国での議論は一見するとアメリカでの議論と似たものにみえてくる。「創造説」「知的設計（ID-Intelligent Design）」などの進化論否定のアメリカ直輸入の議論が、世界中でアメリカの次に多いのは韓国ではないだろうか。しかし、よりたちいって検討してみると、アメリカと韓国の違いを見出すことができる。知の統合・統撰についていえば、その出発点となったウィルソン自身の「統合」と、それを受けた韓国の議論には違いがあるように思われる。それは、ウィルソン自身の「統合」が生物学ないし自然科学への還元の見点が強いものに対して、韓国のそれは、必ずしも生物学や自然科学への還元ではない形の統合にも開かれている点である。その点では、韓国の議論は日本でウィルソン

を支持している人々と共通するものがある。ウィルソンの日本での支持者は「統合」をあまり正面から語らないが、従来の人文社会科学と自然科学を全く別領域として区別してきたことに不満をもっている点と還元主義ではない点は韓国と共通している。

4

以上のような考察は、日韓両国における人文学の将来を考えるにあたって示唆するところがある。近代における欧米文化の世界的拡大によって、現在ではとりわけ英語の支配力が強まっている。自然科学の世界では一次情報の生産は現在ほとんどが英語によるものである。それに対して、これまで人文学の学術論文は日本語で書かれてきた。それも日本や東洋についての研究だけでなく、欧米の哲学や思想などについての研究論文も日本語で書かれてきた。それが可能だったのは、その読者層が存在し、それを受け入れる研究者集団が存在していたからである⁷。

英語の力が強まり「英語第二公用語」など議論があるが、それはあくまで「第二」であり、言語としての日本語が消滅する危機感はない。日常生活や文学の世界では日本語が英語にとって代わられることはないだろう。しかし、人文学の学術言語はどうなるのであろうか。日本史や日本文化についての学術研究では日本語になんらかの位置があたえられるであろう。しかし、そうではない、哲学一般あるいは欧米についての研究はどうなるのであろうか。かつての日本のように、欧米へ行くのに時間的あるいは費用的にも大きな問題があり、文化的に相対的独立性があった時代には、日本の読者共同体に対して日本語で執筆することは人文学の学術研究としても可能であった。しかし、欧米との交流が盛んになってくると、自然科学

7 鈴木直『輸入学問の功罪』筑摩新書、2007年

の世界がそうであるように、人文学の一次的学術生産を日本語で行う必要はなくなってくるようにも思われる。例えば「心の哲学」(philosophy of mind)や「生物学の哲学」(philosophy of biology)のような領域では、日本語ではなく英語で論文を書いたほうが場合によってはよいかもしれない。もちろん、自然科学の場合がそうであるように、二次的な情報としての「啓蒙書」は日本語で書かれたものに需要があり存続するであろうが、一次的な学術生産の場合、例えば学会誌などの論文は日本語でなくなってしまうのだろうか。

日本思想研究などでは日本語の学術的意義がみとめられるであろうが、そうではない欧米由来の哲学用語を用いて行われてきた哲学論文や哲学書の中にも、いわば「J-フィロソフィー」として、引き続き日本語での一次的生産に意義が認められるものが残ると思われる⁸。「J-フィロソフィー」とは、音楽における「J-ポップ」のように、外来起源のものが変容したもののことである。19世後半以降、欧米の社会制度や文化は東アジア世界に大きな影響を与え現在の日本文化の一部となっている。しかし、それは欧米起源ではあるが日本への土着化の過程で変容し、もとのものと同一ではなくなっている。日本語で書かれた哲学書の多くはそうした「J-フィロソフィー」である。日本仏教や日本儒教は、それぞれ「J-仏教」「J-儒教」である。同様な問題は、英語と韓国語の関係についても存在するであろう。

日韓両国は、長い歴史のなかで漢字をはじめ仏教や儒教など多くのものを共有してきた。江戸時代に日本にきた朝鮮通信使は、漢詩や漢文の筆談によって相互の文化交流を行った。20世紀のある時期まで日韓あるいは日韓中の学術交流はあまりなされていなかったが、近年その機会が増えて

8 拙稿「生命の哲学と生物学の哲学：J-フィロソフィーの可能性」『哲学の探求』(若手哲学研究者フォーラム)第34号、2007年、41-51頁

きている。日韓についていえば、以前から日本、韓国のそれぞれが、欧米との学術交流を行ってきたので、「日本－欧米」「韓国－欧米」の交流はかなりあったのに対して、「日本－韓国」の交流はほとんどなかった。かつて日韓両国に漢字をはじめとする共通の文化基盤があったが、現在では、それに加えて欧米の思想や文化も両国で共有されており、ウィルソンやドーキンスなどがその例となる。仏教や儒教が日韓両国で共有されると同時に、その受容や展開の形態が異なっていたように、ウィルソンやドーキンスの受容にも違いがみられるのは、先に指摘したとおりである。こうした点について、英語を経由せずに日本語と韓国語の間で、漢字語の問題などについて検討することは、両国の人文学における日本語あるいは韓国語の意義という観点からも重要である。

かつて日韓中などの漢字文化圏では、筆談による「漢文」が共通言語として機能していた。現在、哲学などの東アジアの国際学会では、多く英語が用いられおり、場合によって現象学やヘーゲル関係はドイツ語が、あるいはフランス現代思想関係ではフランス語が、といった具合であり、日韓中の中で欧米語を経由せずにコミュニケーションを行うのは難しい。しかし、数学や自然科学などと違って人文学の場合、使用言語は内容と切り離すことができない面がある。したがって欧米の言語を仲介とした場合、人文学の内容的な部分が欧米の文化支配に従属してしまう危険性がある。つまり、日本語や韓国語で表現されている内容のうちで、英語で表現しやすいものだけが評価されることになったり、英語の表現が元の言語からずれてしまい「二重翻訳」による誤解が生ずることにもなる。とりわけ、重要な基本概念をめぐってその可能性がある。人文学においては、内容とそれを表現する言語は全く外的に関係しているわけではないので、英語を介さない、日本語と韓国語の直接のコミュニケーションが、とりわけ大きな意義をもっている。例えば、ウィルソンについての日韓両国の議論をともに英語に翻訳して英語のものだけしか用いなかったとしたら、漢字語「統合」

や「統撰」をめぐる議論は消えてしまう。そのため、実際にはこれまでも、英語でコミュニケーションをしている場合でも、それがどう漢字で表記されるかが話題になり、「筆談」が行われることもあった。韓国語や中国語を日本人が習得して直接コミュニケーションを行うことが理想ではあるが、現実にはなかなか難しい。そこで、通訳者に頼ったり、漢字表記のパワーポイントを用いたり、あるいは（特に日本語と韓国語の場合）自動翻訳ソフトを補助的に利用することなどが、さしあたり現実的であろう。そうした観点からすれば、英語を介さない日韓の学術交流には、人文学における日本語あるいは韓国語の将来との関係で大きな意義があると思われる。今後もそうした形の学術交流が進展することが期待される。

付記：本稿は、2008年11月22日にソウル梨花女子大学で行われたシンポジウム「知の統撰・統合について——韓国と日本におけるE・O・ウィルソンの理解を中心に」における発表をもとに、当日の韓国側の発表と質疑の内容をふまえて作成したものである。